

2016年12月の八戸ブックセンター開館以降、これまでにない「本」にまつわる公共施設として、あらゆる企画事業を実施してきました。

開館5周年を迎えられたのは、お客さんはもちろん、コメントを寄稿いただいた方を始めとする、多くの方からのご協力のおかげで、「ひと」との関係の大切さを再認識した5年間でした。

開館当初から、他にはない、ちょっと珍しい公共施設と言われてきていますが、「市営書店」ということばとあわせ、「八戸市＝八戸ブックセンター」が定着し、多くの方に納得いただける10周年、20周年を迎えられるよう、そして、八戸ブックセンターに来たくなる、本を手に取りたくなるような、魅力ある企画を今後も手掛けていきます。

音喜多信嗣

ブックセンターなら、どんなジャンルとも掛け合わせることができる。文学、小説は言うに及ばず、アート×本、キッズ×本、サイエンス×本、ミュージック×本、スポーツ×本……、本という切り口であらゆるものにかかわってゆくこと。これをブックセンターだからできることだ、と固く信じている。まだまだ組んだことのないジャンルに取り組んでゆきたい。哲学などの名著を扱っての＜市内県内高校の「探究」学習×本＞なんてできるといいな。

図書館でない、本屋ではあるけれど本屋っぽくない。その名もズバリ＜本の中心拠点＞という何ともふしぎな施設ですが、今後も、八戸まで足を運んだらふと立ち寄ってみたいと感じてもらえるようなスポットであり続けられるよう、日一日精進していく所存です。

森佳正

小説も、実用書も、絵本も写真集も、詩集だって辞典だって雑誌だって、全部「本」なのだということを、開館からの5年をとおして、八戸ブックセンターは伝えてきたかったのかもしれないと、最近思うようになりました。そんなのあたりまえじゃない、と言われてしまいそうです。けれど、たとえば子どもたちと接するとき、本とえば「最初から最後まで読むべき、物語のようなもの」をイメージしている子が多いことに気が付きます。もちろん、それも間違っていないけれど、もっと、本の懐は広いはずなのにな、と思ったりもするのです。八戸ブックセンターは、本に出合うための、いくつかの仕掛けがあります。一回訪れただけではわからないかもしれません。ぜひ、通って、ゆっくりしながら、自分だけの一冊を“偶然に”見つけてほしいと思っています。

森花子

「本を読む人を増やす」「本を書く人を増やす」「本でまちを盛り上げる」を方針として運営してきた八戸ブックセンターですが、最近では教育機関など、外部の方からも企画のご相談をいただくまでに成長してきました。市内の学校図書館向けにSDGs関連本のご提案ができたことは、八戸ブックセンターならではの取り組みであったと思います。

また、ショートショート作家の田丸雅智さんとワークショップを開催したときに、ショートショート講座を実施した学校で図書室の利用率が上がったというお話を伺い、書くことと読むことは密接に関わっているのだと改めて認識しました。これからもさまざまな角度から、本に親しんでいただけるような企画づくりをしていきたいです。

熊澤直子

八戸ブックセンターで働くようになってから、本の持つ力にいつも驚かされています。本というものが文学だけでなく、美術や音楽、科学、哲学…さまざまな分野に繋がることができ、会いたかった人や、いままで触れることのなかった世界や考え方に出会わせてくれました。もちろん、文章を読むことが苦手な人や、あまり本屋さんに行く機会がない人もたくさんいます。でも、この驚きと感動を、文章を読むことだけではなくイベントや展示を通してひとりでも多くの方に実感してもらえるといいな、と思っています。ここを訪れた人が、さまざまな形で大切な一冊と出会える場所であるように、また、本のまちに住むみなさんが誇りに思う施設であるようにと願いながら、これからもちょっと変わった面白い本屋さんであり続けたいです。

太田博子

八戸ブックセンタースタッフ



音喜多信嗣

nobutsugu otokita



森佳正

yoshimasa mori



森花子

hanako mori



熊澤直子

naoko kumasawa



太田博子

hiroko ōta